

中学校英語科における授業改善の方策

1. 英語科における授業改善の背景

英語科では「読むこと」の指導改善の改善という観点から、昨年度（2017年度）の研究（三年次）に引き続きTop-down reading を中核とした実践的研究を行った。これにより学力向上に資する読力の育成を考えた時、読者の立場の持つ「真意」や「思い」を念頭におき、手帳な「思考」、「理解」を通じて「想像」、「表現」を他人に引き出すことが必要不可欠であるとの認識に至つた。また中学校で何を教えるか（「教えること」）に明示された各学年の内容には、読解技能にかんじて「読解」と「表現」にかかわる能力を顕著に養つていくことが求められている。

このような観点から従来広く取り入れられてきたBottom-up readingから脱却することなくTop-down reading を中核とした実践的研究を通じて得られた成果を、この実践改善の方策として提示することになった。

英 語 科

2. 英語科の授業モデル

実践の方向として昨年度の実践を踏まえつつTop-down reading の実践の方向を定めた。

(1) Pre-reading

題材文のタイトルや内容などがわかりのある題材の提示、英語を聞き取ることに資するとして題材の大きな内容について読解を促す。同時に世帯の英語を聴取し、一問一答に対するreadinessの高揚を図る。

(2) In-reading

題材文として書かれている内容の構造や要旨の把握に資する読解を促す。skimmingやscanningのそれぞれが活動の明確に分け、読者の立場から読解の観点から提示し、全篇の読解が意図的なものとなるように配慮する。

In-reading の段階では読者の立場から読解を促す。特に読者の立場から何箇所も題材文に目を通させることにより、読者の立場から読解を促す。

(3) Postreading

題材文の内容理解にとどまらず、この段階で読解力や読解力の高さを促す。生徒の思考を活性化させるために読者の立場から読解を促す。読者の立場から読解を促す。読者の立場から読解を促す。

3. 授業改善事例の構成

最終年度における実践を振り返ると、各々の読解や読解改善の方向性を踏まえた工夫は次のとおりである。

(1) 指導時間

昨年度の実践は全て1時間の授業時間内に完結し、読解力や読解力の高さを促す。読者の立場から読解を促す。読者の立場から読解を促す。

(2) 指導内容

「読むこと」の指導改善の改善に資する「Top-down reading」や「Bottom-up reading」の指導を促す。読者の立場から読解を促す。読者の立場から読解を促す。

中学校英語科における授業改善の方策

1 英語科における授業改善の視点

英語科では「読むこと」の指導過程の改善という視点から、昨年度（プロジェクト研究第三年次）に引き続きTop-down reading を中核とした実践的研究を行った。これは新学力観に基づいた能力の育成を考える時、個々の生徒の持つ「良さ」や「思い・願い」を念頭におき、多様な「思考」・「判断」そして「技能」・「表現」を最大限に引き出すことが必要不可欠であるとの認識に立つものである。また中学校学習指導要領（「外国語」）に明示されている各学年の内容には、言語活動について「理解」と「表現」にかかわる能力と態度を養うことがうたわれている。

このような観点から従来広く取り入れられてきたBottom-up readingのみに傾斜することなくTop-down readingの要素を多分に盛り込んだ指導過程を組み、その実践的研究を通して得られた成果を、今後の授業改善に向けた1つの方策として打ち出すことをねらった。

2 英語科の授業モデル

実践の方向として昨年度の実践を踏まえつつTop-down reading の指導過程を設定した。

(1) Pre-reading

題材文のタイトルや内容とかかわりのある絵の提示、対話を聞かせること等を通して題材の大まかな内容について推測させる。同時に生徒の興味を喚起し、読むことに対するreadinessの高揚を図る。

(2) In-reading

題材文として書かれている内容の概略や要点の把握につなげる段階である。skimmingやscanningのそれぞれの活動を明確に分け、そのための設問を多様な角度から提示し、生徒の読みが意図的なものとなるように配慮した。

In-reading の段階では読むことの活動に必然性を与え、かつ読み手に異なった角度から何回も題材文に目を通させるために様々なタイプの設問を準備した。

(3) Post-reading

題材文の内容理解にとどまることなく、この段階では理解されたものを媒介として、生徒の思考を活性化させさらに発展的な活動へと結びつける。理解された内容をもとにしての positive transfer をねらった。また、生徒の多様な意見や考えを引き出すことをねらいワークシートを用いて書く作業にも工夫を加えた。

3 授業改善事例の構成

最終年度における実践を推進するにあたり、教材の準備や指導過程にかかわる改善への工夫は次のとおりである。

(1) 指導時数

昨年度の実践は全て1時間の指導過程を前提に取り組んだものであったが、今年度は「読むこと」の活動をより長い指導過程の中で位置付けてみるという意図から2時間の指導時数で構成した。

(2) 指導形態

「読むこと」の指導過程の改善にあたりsolo-teachingに加えてALTとのteam-teachingの形態も取り入れた。Team-teachingで指導にあたることにより必然的に英語によるinteraction が深まり、よりcommunication-based reading activi-

tiesの達成を目指したからである。

(3) 題材の作成

生徒に提示する題材(文)の作成にあたり editing, expanding, supplementing等必要に応じて行った。また team-teaching で用いた題材文は ALT 自身によって作成されたものでもある。

(4) 設問の工夫

当然のことながら「読むこと」の活動もコミュニケーションの1つであるという前提から、生徒が満足感、成就感を味わうことができるような設問の工夫と評価に努めた。具体的には factual question に終始することなく質の異なる他の設問を適宜組み合わせて用いた。(例: questions involving reorganization or re-interpretation, inferential questions, evaluative questions, questions of personal response 等)

この点に関して当教育センター ALT Michelle McKeever から次のようなコメントが得られた。

Higher level thinking questions help students analyze, solve problems, make inferences and form opinions so that they may better understand and interact with the material. Making use of only factual questions does not effectively stimulate students' thinking or involvement.

It should be noted that using different questions for different purposes is of paramount importance.